

そこで日本はもう一度御前会議を開きます。十一月五日です。ここでは甲案と乙案を決めます。甲案は、アメリカの希望をできるだけ取り入れる。この交渉を平和裏に進ませるためにアメリカの言う通り、シナにおける通商は一〇〇％開放する、シナと仏印に進駐している軍隊を二年以内に引き上げる、日独伊三国同盟は死文化する、というものです。この甲案が破れた時のため、さらに乙案も用意します。乙案は、日本の南部仏印進駐以前の状態に復帰するというものです。日本では十一月五日の御前会議でこういう案を決定して、十一月七日来栖大使に甲乙両案を持たせて派遣させます。

しかし、悲しいことに当時、こういう甲案とか乙案とか重要な暗号はすべてアメリカに解読されていたのです。ルーズベルトは日本がどういう案を持ってくるか全部知っていたのです。十二月八日、日本は「ニイタカヤマノボレ」という暗号で真珠湾を攻撃しますが、これもルーズベルトは知っていたのです。アメリカのトールランドという作家は『真珠湾攻撃』という本を書いています。これによると、ルーズベルトは日本の軍艦が真珠湾に近づいて来るのを知っていたというのです。それなのに、真珠湾を警備していたキンメル大將には、わざと電報を打っていないのです。後になって、軍事電報ではなく、わざと商業電報を打ちましたが、その時には間に合いませんでした。